

Aspects of Students' Affect in Remote Singing Activities: Through Educational Practices at Junior and Senior High School

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2023-03-09 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 宮澤, 多英子 メールアドレス: 所属:
URL	https://saigaku.repo.nii.ac.jp/records/1528

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



リモート歌唱活動における学習者の情意の様相

—— 中学校・高等学校での教育実践を通して ——

宮 澤 多英子

I 研究の目的と方法

1. 問題の所在

2020年度の学校教育では、新型コロナウイルス感染症の感染防止対策を行いながら教育活動を継続する努力や工夫が模索された。中等教育の音楽授業においても、空間を共有して音楽活動に取り組む従来の学習形態から、インターネット上の学習システムを活用した画面越しのオンライン遠隔学習へと転換を余儀なくされた。2020年度当初、中学校・高等学校の音楽授業におけるICT活用は対面での授業を前提としており、オンラインを活用したリモートでの活動は想定されていなかった⁽¹⁾。そのため、音楽授業の指導者は学校現場や生徒のオンライン環境の実態を考慮し、学習内容や学習形態を試行錯誤しながら音楽活動を実施することとなった。

特に、対面での授業において実施が困難な活動が、歌唱活動であった。「歌唱」とは、人間にとって最も身近な音である「声」を素材として音楽をつくりだす行為である。自らの身体を操作することでこの「歌唱」は成り立つ。そして、自らの心に生じたイメージや考えといった内なるものを表そうと、意図をもって「声」を操作した時、「声」は表現の媒体となる⁽²⁾。こうして生まれる「歌唱表現」は、自分の心と身体、つまり自分の存在そのものに向き合う行為といえるだろう。さらに集団での歌唱表現では、他者と内なるものを共有し、他者の存在とも向き合うことができる。つまり、学校教育における歌唱活動は、単に音楽を学習するという枠を超え、自己と他者の存在そのものに向き合う中で一つの表現を創造する場であり、他者とのかかわりの中で成長を目指す学校教育にとって、歌唱活動の実施は意義があると考えられる。

筆者は2020年度当時、音楽科の教員として中学校・高等学校での教育実践に携わっていたが、このような考えを踏まえ、感染防止対策と歌唱活動の継続の両立を実現したいと考えた。そこで、対面での歌唱活動が困難である期間に「リモート歌唱」の導入を試みることにした。

2. 研究の目的と方法

本研究の目的は、中学校・高等学校での音楽学習においてリモート歌唱を導入した実践を行い、リモート歌唱活動における学習者の情意の様相を明らかにすることである。学習者の内面に生じる思いである「情意」は、学びに向かうエネルギーであり、特にリモート歌唱のように学習者が経験したことのない活動を行う上では丁寧に見取る必要があり、同時に育むべき力であると考ええる。本研究では、学習者の情意面に着目することにより、リモート歌唱活動の有用性や課題について考察を行う。

研究の方法は、実践的方法をとる。まず、中学校・高等学校の教育実践においてリモート歌唱を導入した学習活動を計画し実践する。次に、リモート歌唱を導入した学習活動におけるワークシートの記述内容と、年度末に実施した音楽授業に関するアンケートから学習者の情意面について分析を行い、リモート歌唱活動の有用性と課題について考察する。

3. 先行研究の検討

コロナ禍において対面での歌唱活動の代替措置として注目されたりモート歌唱の研究は、オンラインでの歌唱授業の実践の紹介⁽³⁾など、実践事例報告や活動における指導者の所感を述べたもの、またICT機器の活用方法に関するものが存在する。リモート音楽活動の実践に関する研究では、日高(2020)によるリモートでの音楽科目の講義や演習の取り組み方や評価の課題に関するものや⁽⁴⁾、矢野(2021)による保育者養成校におけるオンラインでの音楽授業の実践に対して考察を行った研究がある⁽⁵⁾。日高の研究では、インターネット上の学習支援コンテンツの活用や学生がプレゼンテーションソフトを利用したオンライン発表を具体的な事例としてICT活用の効果や課題について述べられているが、リモート歌唱活動に関しては「直接的できめ細やかな実技指導のような効果は得られにく」⁽⁶⁾い等、レッスンを担当した指導者の所感が述べられるに留まっている。また、小林・北見(2021)による教員養成校と中学校でのリモート合唱動画制作の実践事例においても、主に動画制作の流れやその方法が述べられており、学習者側の具体的な学びや達成感などに着目して調査することが今後の課題とされている⁽⁷⁾。

一方、学習者がリモート歌唱活動をどのように捉えたのか、学習者の所感からその教育的効果に言及した研究として、園田(2022)による教員養成課程におけるリモート合唱の実践がある⁽⁸⁾。園田は学習者の活動に対する感想から、合唱表現に対する理解や人とのつながりの実感、音楽に対する姿勢等、リモート合唱ならではの教育的効果を挙げている。しかしながら園田の実践の学習者は教職を志す大学生であり、本研究の対象である中学生や高校生とは心身の発達段階や授業に対する意識などが大きく異なるため、一概に比較できない。

よって、本研究のように中学校・高等学校における学習者の情意面に着目し、学びの主体である学習者がリモート歌唱活動をどのように受けとめたのか、リモート歌唱活動の有用性や課題について考察することは意義があると考ええる。

4. 用語の定義

「リモート」という言葉は本来、複数の対象が離れている状態、遠隔であることを意味し、情報化社会となった近年では「インターネットなどのコンピューターネットワーク上や、遠隔地にあるコンピューター、端末操作で構成された利用環境」⁽⁹⁾を指す。よって「リモート歌唱」とは、「ICTの利用環境下において、現実空間ではなく遠隔で複数の対象が離れた状態で行われる歌唱」と定義できる。また、教育活動における「リモート」という用語は、遠隔で離れた空間同士をパソコン等の情報通信技術によってインターネットの学習システムやオンラインミーティングシステム等を通じてやりとりをする「遠隔教育」における学習形態を示す際に用いられており、リアルタイムでやりとりをする「同時双方向型」と事前に収録された授業を受講する「オンデマンド型」の2つに分類されている⁽¹⁰⁾。本研究で扱うリモート歌唱は、この2つの形態による歌唱活動とする。1つ目は、リアルタイムに学習者と指導者がやりとりをしながら歌唱活動を行う「同時双方向型リモート歌唱」で、オンラインでの音楽授業において導入し、実施したものである。2つ目は、「オンデマンド型リモート合唱」で、学校行事である合唱祭を「リモート合唱祭」として開催した、合唱動画の制作と鑑賞の活動である。本研究における「リモート合唱」とは、ある合唱曲を歌い手がそれぞれ個別に歌って撮影し、それらを1つの動画に編集することによって作りだされた合唱やその映像作品のことと定義する。どちらもA女子中学校・高等学校で実施し⁽¹¹⁾、実践の指導者は筆者である。

Ⅱ 実践の概要

1. 「同時双方向型リモート歌唱」の概要

実践校における2020年度の音楽授業は、Google Classroomのオンライン授業システムを使用したオンライン自宅学習から始まった。音楽授業に関しては、単元や到達目標などシラバスに示したカリキュラムの大枠は変更せず、学習内容や学習形態、評価方法等の一部を変更して実施することとした。そのため当初の予定通り、全ての学年において歌唱表現学習から開始した。

〔対象〕 中学校2・3学年：計49名、高等学校1・2学年：計193名、合計242名

〔期間〕 2020年5月11日～22日

〔学習計画〕 表1参照

オンラインでの音楽授業は各学年全4時間で、実践校の時間割の関係上、学年単位での実施となった。授業の第1時・第2時ではオンデマンド型によるスライド資料の閲覧とWeb動画の視聴を行った。そして、第3時と第4時に指導者が作成したオンデマンド型学習動画の視聴と共に、Google Meetの会議システムを使用して「同時双方向型リモート歌唱」を導入した。本研究では、この第3時・第4時を取り上げる。実践ではオンラインの接続環境を安定させるため、歌唱時には学習者のマイクとカメラをオフにして実施し、指導者と学習者のやりとりには主にチャット機能を使用した。

学習活動は毎時、「経験－分析－再経験－評価」の段階に沿って学習内容を構成した⁽¹²⁾。「経験・分析」では、「オンデマンド型学習動画の視聴」を通して歌唱教材を聴いたり歌ったりしながら単元の学習内容である音楽の諸要素を知覚・感受し、関連する知識について理解する。その内容を踏まえ、「再経験」では「同時双方向型リモート歌唱」を行い、歌唱表現を発展させることを目指す。最後に「評価」として「振り返りシートの記入」を行い、活動を振り返る。従来の対面型授業では、「再経験」の段階でグループワークによる協働的な活動を設定していたが、オンラインでは他者の知覚・感受の内容や表現の工夫等の考えについて話し合う活動の実施が困難であったため、前時の振り返りシートの記述を指導者がピックアップし、「経験・分析」の段階である次時の学習動画内で紹介する方法をとった。そのため「再経験」では、動画内で触れた仲間の意見や考えを自分なりに取り入れながら、指導者の指導に沿って個別で表現を発展させる形をとった。

2. 「オンデマンド型リモート合唱」の概要

2021年1月に発出された緊急事態宣言に伴い、実践校では学内における歌唱活動が全て自粛となった。そのため2月に実施予定であった学校行事の合唱祭が3月に延期され、従来の対面型の演奏会形式での発表をオンライン発表によるリモート合唱祭に変更して実施することとなった。

〔対象〕 中学校1～3学年：計90名、高等学校1・2学年全クラス：計227名、合計317名

〔期間〕 2021年2月12日～3月13日

〔活動計画〕 表2参照

リモート合唱動画の制作には、学校行事の主担当教員と検討した結果、無料でダウンロードができるスマートフォンの動画編集アプリケーションVivaVideo等を使用した動画制作方法を提示することとした。制作方法はリモート合唱動画制作の講習会において、動画制作担当の学習者に次のような制作手順を提示した。まず、学習者が個々に撮影した歌唱動画を自分のパートの動画を編集する動画制作担当者に送付する。次に、動画を受け取った動画制作担当者は、個々の歌唱動画をパート歌唱として1つの動画に編集する。こうして仕上がった各パートの歌唱動画と指揮者、ピアニストの演奏動画を1つに編集することでリモート合唱動画が完成する。できるだけ通

表1 学習計画（第3時・第4時共通）

段階	活動の内容
経験・分析	【オンデマンド型学習動画の視聴】 20分 ・授業開始時刻に音楽授業の Google Classroom にオンライン上で入室する。 ・各自で指導者が作成した学習動画を視聴し、歌唱曲を歌ったり聴いたりしながら自主学習を行う。
再経験	【同時双方向型リモート歌唱】 20分 ・指定された時刻に遠隔システムの Google Meet に入室する。 ・指導者の指示や歌声に合わせて声づくり（体ほぐし・発声など）や歌唱練習を行う。
評価	【振り返りシートの記入】 10分 ・学習内容に関する設問と、授業の感想や質問を Google Forms に記入して提出する。

表2 リモート合唱祭の活動計画

月日	活動の内容
2 / 12	【リモート合唱動画制作の講習会】 ・各クラスの動画制作担当の学習者を対象に、学校行事の主担当教員と指導者が動画制作講習会を実施する。
2 / 13 / 3 / 10	【リモート歌唱の動画撮影】 ・クラスごとに同じ模範演奏の音源をイヤホンで聴きながら、学習者が個別に歌唱（指揮・ピアノ演奏も）動画を自宅で撮影する。 ・音楽授業において、合唱祭の発表曲に関するパートの役割や楽曲に対する自分の考えなどについて、講義形式の授業を実施する。 【リモート合唱動画の制作】 ・動画制作担当の学習者が個別のリモート歌唱動画を編集し、リモート合唱動画を制作する。
3 / 13	【リモート合唱の鑑賞】 ・制作した合唱動画の鑑賞会として、学内でリモート合唱祭を実施する。 ・終了後、感想シートを記入する。

常の演奏発表に近い形で実施するために、指揮者とピアニストの演奏動画に合わせて個々の歌唱動画を作成したいところであったが、撮影・制作が短期間であることを考慮し、Google Classroom 内にアップロードした合唱やパート別演奏の音源をイヤホンで聴きながら歌唱やピアノ演奏、指揮の動画をそれぞれ撮影する方法をとることで、曲のテンポの統一を図ることとした⁽¹³⁾。

Ⅲ 分 析

1. 分析の対象と方法

分析の対象は、①「同時双方向型リモート歌唱」活動を導入した授業後の「振り返りシート」の記述内容、②リモート合唱祭終了後の「感想シート」の記述内容、③2020年度末に実施した1年間の授業に対する「音楽授業アンケート」の集計結果と自由記述回答、以上3点とする。この3点を対象とした理由は、実践直後に記述した①と②から、それぞれの「リモート歌唱」活動に対する学習者の情意を捉え、1年間の歌唱活動を振り返って回答した③から、①と②の「リモート歌唱」と対面型の歌唱活動とを比較した学習者の相対的な情意を捉えることをねらいとしたからである。本文中ではそれぞれ①～③の記号で示す。なお、①～③には全て、オンライン上で記入と提出を行う Google フォームを使用した。また、「リモート歌唱」に対してできるだけ多くの学習者の情意面を捉えるために、本研究では分析対象の学年や校種を限定せず、①～③それぞれに回答した学習者全員を対象とした。

分析を行うにあたり、①と②が全て自由記述内容の分析となるため、単語や文章表現、文脈などから客観的に内容や意図が読み取れるものを対象として項目の分類を行い、内容や意図が不明瞭なものは対象外とした。分類後、活動の中でうまくいったことなどポジティブな情意に関する記述から「リモート歌唱」の有用性を、活動の中でうまくいかなかったことなどネガティブな情意に関する記述から課題を整理した。

2. 「同時双方向型リモート歌唱」に対する分析

(1) 「振り返りシート」の分析

「同時双方向型リモート歌唱」に対する分析は、①の「振り返りシート」と③の「音楽授業アンケート」が対象となる。

①のシートには、それぞれの学年の「本時の学習内容に対する設問や自分の考えを記入する必須項目」と「授業の感想や質問を記入する任意項目」を設定した。必須項目の記述内容は、指導者が作成したオンデマンド型学習動画の内容をもとに回答できるように設定したため、従来の対面型授業で記入するワークシート類の記述内容と差は見られなかった。この結果からは、学習内容を動画として文字や映像で示すことにより学習のねらいが明確になることや、個人の判断によって繰り返し再生できることから、対面型授業と同等に学習者が学習内容を理解することにつながったと推察できる。リモート歌唱に関する情意については、「授業の感想や質問を記入する任意項目」に関連するため、分析対象はこちらの項目とした。回答率は、任意項目のため第3時が学習者の総数の76%、第4時が54%であった。学年ごとの回答者数と回答率を表3に示す。以後、本文中の①とはこの項目を指す。記述内容の分析は、1人の回答に複数の異なる記述項目がみられた場合には、それぞれの項目に記述数1とした。表4に記述内容の分析結果を、表5に記述例と表4における分類を示す⁽¹⁴⁾。

本研究の分析では、活動の中で感じた意欲や楽しさ、満足感といった「ポジティブな情意に関する記述」にはアルファベットの「P」を、物足りなさや難しさといった「ネガティブな情意に関する記述」にはアルファベットの「N」を付けて分類した。それぞれの記述数の合計は、Pが297、Nが65であり、総記述数の82%が活動に対するポジティブな情意に関する記述であった。ポジティブな情意に関する記述が8割以上を占めていることは、第3時と第4時どちらにも共通している。このことから、学習者がリモート歌唱を導入したオンラインでの歌唱表現学習を概ね肯定的に受けとめ、活動の有用性を実感したことがうかがえる。表5のPとNに続くアルファベット小文字の記号については、「a」が活動全体に対する意欲や興味、関心など「活動に対する情意」に関するもので、「b」がより具体的な「学習内容や指導方法に対する情意」に関する分類を表す。そしてこれらのアルファベットの記号に続く数字が、それぞれの分類における具体的な

表3 ①の回答者数と回答率

学年	学習者数	第3時		第4時	
		回答者数	回答率	回答者数	回答率
中2	30	17	56%	18	60%
中3	19	19	100%	11	57%
高1	104	102	98%	69	66%
高2	89	47	52%	33	37%
合計	242	185	76%	131	54%

表4 ①における記述内容の分類項目と記述数

記号	記述内容の分類項目	記述数		
		第3時	第4時	合計
Pa-1	次回の授業への期待感、今後の授業に向けた意欲	40	20	60
Pa-2	リモート歌唱活動に対する満足感や楽しさ、面白さ	34	14	48
Pa-3	オンラインでの授業やリモートによる歌唱の楽しさ	24	18	42
Pa-4	オンライン授業後の対面型歌唱表現活動への期待感	30	8	38
Pa-5	オンラインで指導者や仲間と学習できたことに対する満足感	9	2	11
Na-1	リモートによる歌唱活動への物足りなさや寂しさ	4	0	4
Pb-1	具体的な学習内容に対する興味・関心や指導の分かりやすさ	9	25	34
Pb-2	指導者による歌やピアノを伴う学習指導の効果や分かりやすさ	23	4	27
Pb-3	前回の授業と比較した自身の歌唱表現の向上	0	22	22
Pb-4	声づくり（体ほぐしや発声等）に対する効果の実感や肯定感	11	4	15
Nb-1	リモート歌唱時の技能面や暗譜等の習得の難しさや不十分さ	28	16	44
Nb-2	リモート歌唱時の技能面に関する質問や疑問、指導への要望	3	4	7
Nc-1	ネットワーク環境のトラブル	6	4	10

表5 ①の記述例と表4における分類

先生や皆と空間を超えて練習ができてとても面白かったです。発声練習や体操などもとてもわかりやすかったです。また、音楽室を見て学校で皆で歌うことが楽しになりました。次の授業も楽しみです。(高1)
[表5の記号との対応] ・下線部 () : Pa-5 ・点線部 () : Pb-4 ・二重線部 () : Pa-4 ・波線部 () : Pa-1

分類項目となる。

最も多くの記述があった項目は、『次回の授業で歌うフランス語と今回歌った日本語とではどのような違いがあるか楽しみです(高2)』『これから歌詞も覚えて音程も正しく歌えるように頑張ります(高1)』といった記述が見られたPa-1の「次回の授業への期待感」や「今後の授業に向けた意欲」に関するものであった。このPa-1を含む、ポジティブな「学習活動に対する情意」に関するPaの記述の総数は、Pの総数の67%を占めており、PとNを合わせた全記述の54%にあたる。よって、「同時双方向型リモート歌唱」活動は、学習者の意欲や興味、関心等の「活動に対する情意」を引き出すという点において、オンラインでの音楽授業での有用性があると考えられる。残りがPbの「学習内容や指導方法に対する情意」に関するポジティブな記述で、これはaに分類した記述よりも活動に対する具体的な内容が記述されたものである。Pbでは、『自分で歌うだけだと音程が曖昧な部分があったので、meetで解決できて良かったです(中3)』『声の体操をただけで声が少しだけ響いているようなそんな気持ちになりました(高1)』など、「同時双方向型リモート歌唱」活動における歌唱練習や発声等の声づくりに対して効果を実感した記述が見られた。

一方、合計記述数65のNについては、aに関する記述はNの記述全体のわずか6%で、「活動

に対する情意」に関するネガティブな記述はごく少数であった。Nでは、78%を「学習内容や指導方法に対する情意」といったbに関する内容が占めている。Nbの2項目を合計した51の記述は、①全体の記述数の14%にあたり、少数ではあるが一定数の学習者が学習内容の中でも特に歌唱の技能面に対して難しさや不十分さ、疑問などのつまずきを感じていることが読み取れる。

このようなつまずきの内容は、それぞれの学年の歌唱教材の音楽的特徴を表現するための技能と一致する傾向があった。例えば、『夏の思い出』を扱った中学校第2学年では学習内容が「旋律の音の動きと強弱」であったところ、『ゆっくりした曲だから音のとり方と歌詞との間隔が難しかった』『声を伸ばす時に途切れてしまうときがあった』といった内容が見られ、曲のフレーズ感を感じ取って歌うことやフレーズを表現するための呼吸のコントロールの技能がうまくいかない記述がみられた。つまり、ネガティブな情意であるが、学習内容を把握し、歌唱表現をつくりあげる思考錯誤のプロセスとも捉えることができる。第3時におけるNbの31の記述のうち11がこのような中学校第2学年の学習者のものであり、学年の学習者の総数が30に対して高い割合でネガティブな情意に関する記述が見られた。そのため、第4時の授業では、「同時双方向型リモート歌唱」活動においてフレーズの歌い方について重点的に指導を行った。また、リモート歌唱活動後に視聴するオンデマンド型学習動画内でも再度フレーズを意識しながら自主練習ができるような内容を設定した。その結果、第4時ではNに関する回答が0となり、『meetの授業がとても楽しかったです。動画の授業もとてもわかりやすくてよかったです』『一人で動画見ながら練習するよりもワンフレーズずつお手本で歌ってくれたときのほうが理解しやすくてよかったです』というようなPに関する記述が22見られた。「同時双方向型リモート歌唱」の活動では、歌唱時に学習者のマイクとカメラをオフにして実施することから、学習者のつまずきを活動内で把握することが困難である。リモート歌唱活動内で学習者と指導者とのやり取りに使用したチャット機能では、うまくいかなかった点や質問などを書き込むように指示したものの、「できました」「大丈夫です」といった短い回答が大多数を占め、授業内で生かす場面はほとんどなかった。この結果からは、活動後の振り返りシート等でそのつまずきの内容を把握して次時のリモート歌唱活動でフォローすることによって、「同時双方向型リモート歌唱」活動においても、対面での歌唱活動と同様に学習者が試行錯誤しながら歌唱表現をつくりあげるプロセスを実現できると考える。

その他にも、同時双方向型のリモート学習形態ならではの内容として、Nc-1の「ネットワーク環境のトラブル」に関する記述が10見られたが、本研究では情報機器の環境整備については記述数の提示に留める。

(2) 「音楽授業アンケート」の分析

年度末に実施した③の「音楽授業アンケート」は、中学校全学年と高等学校第1・2学年、合計

317 名を対象に実施した。回答期間は、2021 年 3 月 15 日～17 日で、回答者数は 234 名であった。表 6 に校種別の回答者数と回答者の割合を示す。アンケートは全 8 項目設定したが、本研究では①と②の分析結果に関連する項目のみを対象とする。

[アンケート項目 1] の「1 年間の歌唱授業の中で、最も楽しさを感じた授業はどれですか」では、「同時双方向型リモート歌唱」を導入した授業に対する回答が 18 人とごく少数であった。表 7 に結果と自由記述の分類を示す。「最も楽しさを感じた」理由についての自由記述回答には、《新しい形でのライブ授業だったから (中 2)》《今までにない授業方法だったので、特別感を感じました (高 1)》などが見られ、新しい試みであるリモート歌唱という学習形態自体に魅力を感じたことがその理由として読み取れた。さらに、[アンケート項目 2] の「1 年間の授業の中で最も楽しさを感じなかった歌唱学習内容はどれですか」において、「同時双方向型リモート歌唱」が最も多い結果となった。表 8 に結果を示す。「最も楽しさを感じなかった」理由についての自由記述回答には、《直接声を聞きながら歌唱をすることができなかったから (中 2)》《家だと歌いづらかったから (中 3)》《あまり音楽の授業の良さが生かせていないと感じたからです (高 1)》《友達ともこうしたら良いなどと話すことも出来なかったからです (高 2)》などがみられ、「同時双方向型リモート歌唱」では主体的に表現する意欲や協働的に表現をつくりあげる楽しさを感じる事が

表 6 ③の回答者数と回答率

学 年	対象者数	回答者数	回答率
中学校 1～3 学年	90	73	81%
高等学校 1・2 学年	227	161	70%
合 計	317	234	73%

表 7 [アンケート項目 1] の結果

「最も楽しさを感じた学習」の選択肢	回答者数
㊤講堂と会議室 (高校生はラウンジも) に分かれて行ったフィジカルディスタンスをとったパート練習 (2 学期実施)	97
㊦合唱祭での発表曲や合唱の知識や自分の考えについての講義型の授業 (3 学期実施)	53
㊧講堂で行ったフィジカルディスタンスをとったクラス全体での歌唱授業 (1・2 学期実施)	48
㊨オンライン授業でのリモート歌唱活動 (1 学期実施)	18
㊩オンライン授業での指導者が作成した歌唱学習動画の視聴 (1 学期実施)	10
㊪全て楽しくなかった	8
㊫の自由記述回答の分類と記述数	
・新しい学習形態だった、特別感を感じた (9)	
・普段の授業と変わらず楽しめた (5)	
・その他 (4)	

表 8 [アンケート項目 2] の結果

「最も楽しさを感じなかった学習」の選択肢	回答者数
㊰オンライン授業でのリモート歌唱活動 (1 学期実施)	53
㊱オンライン授業での指導者が作成した歌唱学習動画の視聴 (1 学期実施)	47
㊲合唱祭での発表曲や合唱の知識についての講義型の授業 (3 学期実施)	28
㊳講堂と会議室 (高校生はラウンジも) に分かれて行ったフィジカルディスタンスをとったパート練習 (2 学期実施)	17
㊴講堂で行ったフィジカルディスタンスをとったクラス全体での歌唱授業 (1・2 学期実施)	7
㊵全て楽しかった	82
㊶の自由記述回答の分類と記述数	
・やりにくい、うまくいかない、難しい (11)	
・乗り気になれない、楽しくない、寂しい (11)	
・音ズレなどネットワーク環境がよくない (11)	
・みんなで歌っている感じがしない (7)	
・対面ではない (5)	
・音楽の授業の良さが生かせていない (3)	
・その他 (5)	

難しい現状がうかがえた。

表7の結果では上位3つが対面型の授業内容であり、学習者が楽しさを感じる歌唱表現活動が仲間と空間を共有して行う対面型の活動であることが読みとれる。最も多い回答が見られた「フィジカルディスタンスをとったパート練習」に関する記述では、《同じパートの仲間と、一緒に歌って考えながら、深く求めていけたのが楽しかったです（中1）》《パートごとに練習をすることにより、自分では気づかなかった改善点や、みんなで合唱をより良くするためのアドバイスをし合う事ができたからです（高1）》といった自由記述回答が見られた。この結果からは、歌唱表現学習の楽しさの情意には、協働的に表現をつくりあげる活動が不可欠であることが改めて確認された。

3. 「オンデマンド型リモート合唱」に対する分析

(1) リモート合唱祭終了後の「感想シート」の分析

「オンデマンド型リモート合唱」に対する分析は、②のリモート合唱祭終了後の「感想シート」と③の「音楽授業アンケート」を対象とする。まず②について述べる。

②の回答者数は、中学校第1～3学年82名、高等学校第1・2学年205名、合計287名で、リモート合唱祭当日に記入し、参加者全員が回答した。②の記述内容の分類項目と記述数を表9に示す。分析の方法及びアルファベット小文字と数字の記号の分類については①と同様である。総記述数は368で、Pが310、Nが58で、総記述数の84%が活動に対するポジティブな記述であった。Nの記述だけを回答した学習者は全回答者287名中5名だけで、ほとんどのNは表10の記述例のようにPと共に記述されており、表10の【あ】の記述のように動画制作に対してNであっても鑑賞活動に対してはPであったり、【い】の記述のように最終的にNよりもPが上回ったりするものも多数みられた。この結果からは、対面での合唱発表ではないことに対するネガティブな情意が、鑑賞活動の過程を経てポジティブな情意に変容したことが読みとれ、学習者がリモート合唱動画による鑑賞を新しい発表形態として肯定的に受けとめたことがうかがえる。

aに関しては、Pa-1～3の3つの分類項目を合わせて156という多数の記述があり、《動画でも伝わるくらいどの学年も迫力があり素敵な合唱祭でした（高1）》のように、学習者がリモート合唱祭に対して興味・関心をもち、好意的に捉えている内容が見られた。一方で、Na-1では《リモートなのにこんなにきれいで、実際に一緒に歌えたらもっときれいだっただろうなと思いました（中2）》《来年は実際に声を合わせて歌える合唱祭を迎えたいなと改めて感じました（高1）》のように、リモートによる合唱発表に対する物足りなさや、対面での合唱祭を望む記述も23見られた。

Pbについては、aに分類した記述よりも具体的な活動や取り組みの内容について記述されたも

表9 ②の記述内容の分類と記述数

記号	記述内容の分類項目	記述数		
		中学	高校	合計
Pa-1	リモート合唱祭の楽しさや良さ、面白さ	29	57	86
Pa-2	オンライン発表の新鮮さや良さ	13	25	38
Pa-3	リモート合唱祭のすばらしさや感動	5	27	32
Na-1	対面型での発表への欲求や心残り、物足りなさ	6	17	23
Pb-1	合唱発表における歌声やハーモニーの美しさ	22	59	81
Pb-2	合唱発表における各クラスのまとまりや個性、工夫など表現の良さ	9	31	40
Pb-3	音楽科教員のリモート演奏の良さ	3	9	12
Pb-4	取り組みに対する自分や周りの頑張り	2	8	10
Pb-5	映像制作係の頑張りや努力への感謝	3	8	11
Nb-1	動画制作の大変さ、難しさ	5	25	30
Nc-1	タイムラグや回線トラブルに対する残念さ	4	1	5
	その他（活動と関連しない内容等）	3	5	8

表10 ②の記述例と表9における分類

【あ】 オンラインだと編集の技術が必要だったり、合唱の醍醐味であるハモリの楽しさを味わえなかったりと大変だったが、思ったより楽しく鑑賞できた。（中3）
【い】 今年は舞台で歌えなかったけど、歌だけでなくオンラインだからこそ各クラスの個性の表現などを見ることができて楽しかった。舞台上に立ったときに味わえる緊張感が好きなので講堂で歌えなかったのは残念だけど最後の合唱祭ができてよかったと思う。動画を編集してくれた係に感謝したい。（高2）
〔表9の記号との対応〕
【あ】 ・下線部 () : Nb-1 ・点線部 () : Pa-1
【い】 ・二重線部 () : Pb-2 ・破線部 () : Na-1 ・波線部 () : Pb-5

のである。Pb-1～3は合唱祭当日の鑑賞活動に対する肯定的な内容で、合わせて121の記述が見られたPb-1とPb-2は、『高校生の歌声がとてもよく響いていて素晴らしいと思いました（中2）』『みんな一人ひとり気持ちよく歌っていて、揃っているのが格好良かったです（高2）』のように、歌声の響きや複数の声部が重なり合う歌唱表現のよさや美しさを感じ取った内容である。またPb-4とPb-5は、合唱祭までの活動に関する自身や動画制作係の仲間への頑張りを認める肯定的な内容である。Pb-4では『大変だったが編集も含め自分もよく頑張れたと思う（高2）』といった記述が、Pb-5では『編集者、苦勞してくれてありがとう。あなたのおかげで素敵な合唱が完成したと思います（高1）』といった記述が見られた。一方のNbでも、「苦勞」や「頑張り」に関連した内容が表れている。Nb-1に分類した『編集で一生分の（発表曲のタイトル）を聞いた気がする。来年は普通にやりたい（高1）』といった記述からは、合唱動画編集の苦勞と負担が読み取れる。Nb-1の「動画編集の大変さ、難しさ」がNの総記述数の半数以上を占めていることから、本実践の動画制作方法では、動画制作を担当した特定の学習者への負担が大きいことが課題の1つといえるだろう。

(2) 「音楽授業アンケート」の分析

〔アンケート項目7〕の「リモート合唱動画をつくる経験は、あなたにとってどのような経験でしたか」では、回答者の89%がリモート合唱動画を作る経験を「よい経験だった」と肯定的に捉えた結果となった。表11に結果を示す。また、「よい経験だった」理由についての自由記述回答

例を表12に示す。表12の下線部()は、「新しい発表の形態に挑戦できた」ことに対してポジティブな捉え方をしている箇所を示す。特に【え】の記述では、点線部()の記述のように実際に自身のリモート歌唱動画の撮影時にはネガティブな捉え方をしていたのにもかかわらず、リモート合唱祭で完成したリモート合唱動画の鑑賞活動を経験したことによって音楽の新しい発表・表現形態を経験できた、とポジティブな捉え方へと変容したことが読み取れる。このような捉え方に対する情意の変容は【お】を含めて他の記述にもみられ、リモート合唱発表では鑑賞活動を活動計画の中で丁寧に位置付けることが重要となることがうかがえた。表11の◆の印を付けた分類項目は、従来の対面型の演奏会形式による合唱祭では見られない、「リモート合唱の制作と鑑賞」活動ならではの内容を表し、全記述数192のうち163の記述がこちらに含まれる結果となった。このことから、「よい経験だった」理由の84%がリモートによる演奏発表形態であったことが関係していることが分かる。

また、[アンケート項目5]の「自分の動画を作成した時、3学期の授業で学んだ合唱についての知識や考えは役に立ちましたか」という項目では、81%の学習者が「役に立った」と回答した。表13に結果を示す。「役に立った」内容として最も回答数が多かったものが「合唱における旋律

表11 [アンケート項目7]の結果

回答の選択肢	回答者数
㊦とてもよい経験だった	140
㊩どちらかといえばよい経験だった	68
㊨あまりよい経験ではなかった	19
㊧全くよい経験ではなかった	7
㊦㊩の理由についての自由記述回答の分類と記述数	
・音楽の新しい発表・表現の形態を体験できた	(120) ◆
・今回のリモート歌唱の経験が今後に生かせる	(27) ◆
・仲間と工夫できた、協力できた	(17)
・発表として結果を残せた、良い作品ができた	(9) ◆
・係として人に伝えることの難しさややりがいを体験できた、挑戦する大切さを知った	(8)
・普通に歌えることのありがたさを知った	(4) ◆
・価値観を変えてくれた、新しい視点を得ることができた	(3) ◆
・係生徒の大変さを知ることができた	(2)
・楽しかった	(2)

表12 [アンケート項目7]の自由記述回答例

【う】今までになかったことに挑戦できたから(中2)

【え】私は、合唱とは多くの人と一緒に歌ってハーモニーを作り出すものだと思っていたのではじめはリモートでやるのは合唱ではないと思っていました。しかし、実際編集されたものを見て、思ったよりきれいにハモれていてリモートでも合唱ができることに驚き、今までやったことのないことにも挑戦できたのでこのリモート合唱はいい経験だったと思いました(高2)

【お】絶対にできない...満足できない...やらないほうがマシ...などと思っていたので、今回のリモート合唱祭は、自分の考えや価値観を大きく変えてくれるとてもいい機会になったと思ったからです(高1)

表13 [アンケート項目5]の結果

[アンケート項目5]に対する回答の選択肢	回答者数
とても役に立った	92
やや役に立った	87
授業を受ける前に録画したため、実際の役には立たなかったが、今後の役に立つと思う	12
あまり役に立たなかった	22
全く役に立たなかった	3
授業を受ける前に録画したため、実際に役に立たなかったし、今後も役に立たないと思う	1
その他	17

の構成（主旋律、飾りの旋律、ハーモニーをつくる旋律）の知識」で108の回答があった。次に87の回答があった「自由曲のパートの役割を調べたこと（主旋律、飾りの旋律、ハーモニーをつくる旋律）」、続いて78の回答があった「自由曲のそれぞれの部分の歌い方の工夫について、自分の考えをワークシートに記入したこと」など、実際の歌唱活動を伴わなくとも、音楽授業において合唱に関する知識や楽曲に対して思考する活動が個別でのリモート歌唱時に役に立つと学習者が実感していることが読み取れた。また、表7に示した〔アンケート項目1〕の「最も楽しさを感じた学習」では、53名がこの講義型の学習を挙げており、歌唱活動を伴わなかったのにもかかわらず、《合唱祭に向けてみんなで頑張ったのが楽しかったです（中2）》といった記述が見られた。

一方、表13の「その他」の回答者の中には、合唱祭のリモート歌唱に参加しなかった学習者5名が含まれている。この5名は、前年（2019年）度に実施した対面型の演奏形式による合唱祭には参加しており、対面での音楽授業における歌唱活動では前向きに取り組む姿勢がみられる生徒である。この5名のアンケートの回答の中には、参加しなかった理由として《自分の顔を動画に収めたくなかった。動画を撮ってまでやる意味がわからなかった》《そこまでやる意味を感じなかったから》といった記述が見られた。5名のうちの3名はリモート合唱祭当日の鑑賞会に参加しており、②の感想シートの記述では3名全員に演奏に対するポジティブな記述が見られた。従来の発表形態であれば参加したであろう学習者が、動画による発表に抵抗感をもち、活動を受け入れられなかったことは、リモート歌唱の課題の一つとして挙げられる。

IV 結 論

1. 結果と考察

分析の結果、「同時双方向型リモート歌唱」については、活動において学習に対する興味・関心等の情意が表れたことが明らかとなった。しかしながら、学習者が「1年間の歌唱学習の中で最も楽しさを感じなかった」という結果と合わせると、この肯定的な情意は活動の中身である学習内容に対するものというよりも、新しい試みとしてのリモートでの学習形態自体に魅力を感じた一過性の情意であったことが推察される。課題としては、「同時双方向型リモート歌唱」では表現する意欲や協働的に表現をつくりあげる楽しさを感じる点が挙げられる。また、少数ではあるが活動内容や指導に対してつまずきを感じている学習者が存在することも確認された。ただし、少数の学習者のつまずきに対しては、授業後の振り返りシートで指導者がつまずきを把握し、次時でのフォローアップや活動計画の構成を工夫することによって、ポジティブな情意へと変化することも分析を通して明らかとなった。

「オンデマンド型リモート合唱」については、学習者がリモートでの合唱発表と鑑賞の活動に興味・関心をもって好意的に受けとめ、特に鑑賞活動を通してその肯定感がさらに高まったことが挙げられる。また、個別での歌唱動画の撮影時や編集時にネガティブな捉え方があった場合でも、リモート合唱発表の鑑賞活動を経験することによってポジティブな捉え方に変容する傾向が見られた。さらに、鑑賞活動において歌声の響きや声部の重なりなど、合唱表現としてのよさや美しさを感じ取ったことも確認された。個別での歌唱動画の撮影に対しては、音楽授業において合唱に関する知識や楽曲に対する自分の考えを深めた学習が役に立ったと多くの学習者が実感した結果となった。課題としては、動画制作担当者の負担が大きいこと、リモートによる発表形態に対して抵抗感をもつ学習者がいることが挙げられる。

以上の結果を踏まえ、今後の中学校・高等学校の歌唱表現学習におけるリモート歌唱の可能性について考察する。最も注目すべき点は、リモート合唱動画の制作と鑑賞活動の有用性である。個々の歌声を録音したものを合唱として編集することで、歌声の響きや声部の重なりなど、合唱の表現のよさや美しさを感じ取ることができるという効果は、合唱祭という大掛かりな行事だけでなく、対面での歌唱表現学習で曲の一部に対して実施するだけでも有効であると考えられる。例えば、「同時双方向型リモート歌唱」に取り入れることで学習者が楽しさを感じる活動への転換が期待できるだろう。また、本研究におけるリモート歌唱は社会情勢に左右され、十分な準備と計画のもとで実践できなかったが、リモート歌唱という個の環境下での活動であったとしても、学習者のポジティブな情意を引き出す、「仲間と協働的に表現をつくりあげる楽しさ」を活動の中に組み込み、余裕をもった活動計画を立案することが必要となるだろう。

2. 今後の課題と展望

本研究では、学習者の様々な心情を一律に「情意」として扱ったが、リモート歌唱における情意の段階の深まりや変容が学習者の歌唱表現にどのような影響を及ぼしたのかという分析には至らなかった。今後の課題としたい。また、本研究で有用性が明らかとなったリモート合唱動画の制作と鑑賞活動の利点を生かした協働的な学習を考案し、学習者全員が無理なくリモート歌唱を受け入れることができるリモート歌唱活動の展開についても検討を進めたい。

付記

本研究は、日本学校音楽教育実践学会第26回全国大会（オンライン開催）における研究発表をもとに、用語の定義や分析の視点を再検討し、加筆・修正を行ったものである。

《注》

- (1) 文部科学省「中学校音楽科, 高等学校芸術科(音楽)の指導における ICT の活用について」https://www.mext.go.jp/content/20200911-mxt_jogai01-000009772_06.pdf (最終閲覧日 2021 年 8 月 7 日)
- (2) 小島は表現媒体の条件として, 身体諸感覚器官でとらえられるもの, 内なるものの表現という目的に使用されているもの, 2 点を挙げている。小島律子 (2017)「表現と媒体」『音楽教育実践学事典』音楽之友社, p. 232
- (3) 例えば, 小島綾野構成 (2020)「オンライン授業制作の最前線」『教育音楽 中学・高校版』音楽之友社, 第 64 巻第 7 号, p. 24 では, 小梨貴弘によるオンラインでの歌唱学習用の動画作成を行った事例が紹介されている。
- (4) 日高まり子 (2020)「リモートによる音楽科演習の一考察——Zoom を使った音楽の学修と評価——」宮崎国際大学教育学部紀要『教育科学論集』第 7 号, pp. 90-100
- (5) 矢野愛実 (2021)「オンライン授業の一考察: 保育者養成校における音楽授業の実践」小田原短期大学研究紀要 (51), pp. 323-332
- (6) 日高まり子 (2020) 前掲論文, p. 98
- (7) 小林恭子・北見響 (2021)「教育現場におけるリモート合唱指導と動画制作の実践」『音楽学習研究』音楽学習学会, 第 17 巻, pp. 57-66
- (8) 園田葉子 (2022)「『音楽科指導法』におけるリモート合唱の実践指導について——コロナ禍の制限から可能性へ——」『学校音楽教育実践論集』日本学校音楽教育実践学会, 第 5 号, pp. 37-38
- (9) 村松明監修 (2012)「リモート」『大辞泉【第二版】下巻せーん』小学館, p. 3809
- (10) 文部科学省政策審議会 (2014)「高等学校における遠隔教育の今後の在り方に関する主な論点」https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/104/shiryo/attach/1352880.htm (最終閲覧日 2021 年 10 月 3 日)
- (11) 本研究は, 実践校の学校長にデータの掲載と本稿の執筆について許諾を得ている。
- (12) 本実践では, 学習者の経験を継続的に再構成していく学習過程として, 生成の原理による 4 つの段階によって授業を構成した。小島律子 (2015)「経験の再構成としての授業展開」小島律子編『音楽科授業の理論と実践 生成の原理による授業の展開』あいり出版, pp. 58-73
- (13) 本実践では, 合唱楽譜に付属しているウィンズスコア社の参考演奏の CD 音源を使用した。
- (14) 表の記述例及び本文中の《 》内に示した学習者の記述は, 学習者の記入した原文をできるだけ維持する形で, 文末表現等を一部変更して掲載している。

(提出日: 2022 年 9 月 7 日)